

論文の内容の要旨

論文題目：初期キェルケゴールにおける美学——美的「宥和」論の構築——

氏名：木瀬 康太（きのせ こうた）

本論文は、19 世紀デンマークの思想家キェルケゴールが、日記記述を始めた 1834 年から、最初の偽名著作『あれか、これか』を刊行する 1843 年に至るまでの初期著作活動において、「イロニーからの自由」という問題意識のもとに美的「宥和」についての理論を構築して行った過程を、彼の美学の確立過程として検証しようとする思想史研究である。

まず序論で、彼における「美学」の定義と、「自由」、「イロニー」及び「美的」という語の使用法を示した後、本論文の研究方法について叙述した。「美学」の定義は、「客観性に対する思想の態度」であるという、アドルノによる定義に依拠する。またキェルケゴール思想における「自由」には、能動的に真理に関わる実践的態度という意味が込められている。そしてキェルケゴールにとって「美的」という語には、アドルノも指摘しているように、三つの意味が存在する。第一に、芸術作品及び芸術理論について論じる際に用いられる意味である。第二に、「生き方の領域」を論じる際に用いられる意味である。そして第三に、真理内容としての主観性ないし内面性の伝達方法、即ち「イロニー」という「間接的伝達」を論じる際に用いられる。本論文でとりわけ問題にするのは第三の用法である。

第一章では、キェルケゴールが「イロニーからの自由」という問題意識を持つに至った経緯と、その問題意識の内実について考察した。彼はシュライアーマッハー神学についての批判的研究を契機として、「人間の自由」という問題意識に目覚めた。そして「間接的伝達」としての「イロニー」は、アドルノの表現でいえば、「主観と客観との疎外」という認識論的問題を抱えている。つまりキェルケゴールのイロニーには、個々人にとっての

ありのままの人生や現実的世界の諸現象は、人間の主観における概念的把握によっては決してそのまま正確に表現されえない、という認識論的問題意識が内在している。

第二章では、キェルケゴールにおける美学研究の端緒について考察した。彼は、シュライアーマッハー神学を始めとする既存の神学に対する不満、及び父ミカエルからの厳格な倫理的・宗教的な教育に対する抗議として、宗教に対する否定的立場を示していると自らが考えていた「三つの偉大な理念」、即ちドン・ファン、ファウスト、及びアハスヴェルス（永遠のユダヤ人）の研究に没頭するようになる。そして「三つの偉大な理念」への関心は、キェルケゴールにおいてはより一般化された形で、「ロマン主義的なもの」への関心として自覚されるようになる。さらに彼は当初、自らの美学において、「自由」の理念の原型を、この「ロマン主義的なもの」という概念に求めようとしていた。

第三章では、彼における、イロニーについての知見の拡大過程について考察した。主観の無限性を強調する「ロマン主義的なもの」という概念は、再三再四個々人の主観性に立ち返るロマン主義的イロニーと結びついてしまうことになり、結局キェルケゴールが目指す「イロニーからの自由」には至りえなかった。彼は恩師メラーによる警告の言葉を聞いたことをきっかけとして、「ロマン主義的なもの」に囚われていた自分自身を客観視するために、イロニーについて、より包括的かつ俯瞰的な考察を行うようになった。そしてキェルケゴールは、「間接的伝達」としての「イロニー」に付随する「主観と客観との疎外」という問題を、美的「宥和」という形で克服しようと試みた。キェルケゴールにとって「宥和」とは、「イロニーからの自由」、即ちイロニーから解放された状態を指す。そしてこの状態に達するためには、美的「宥和」と宗教的「宥和」の二つの方法しかない。

第四章では、彼におけるイロニー論以外の美学的諸考察を、イロニー論との関連において考察した。彼は宗教的「宥和」の触媒であるフモールについては、「冒瀆的なもの」に接近する危険性を察知したため、もう一つの「宥和」である美的「宥和」についての理論を構築することに、まず全力を注いだ。そして恩師メラーの死を主なきっかけとして、自らの美学的諸考察をまとめることを考えるようになって行く。

第五章では、イロニーという方法において主観と客観とが互いに疎外されているという問題が、キェルケゴールのマギスター学位論文『イロニーの概念について』の中でも論じられており、その問題の解決策も提案されているということについて検証した。その解決策が「統制されたイロニー」である。美的「宥和」の触媒としての「統制されたイロニー」は、人間の主観性が有限であることを教え、また、神の摂理の必然性と、人間世界の複雑性との間の関係性としての「客観的なもの」のほうを注視することを諭す。このような論しによって、「主観と客観との疎外」という問題は克服される。

第六章では、キェルケゴールに「宗教的覚醒」をもたらした、レギーネ・オルセンとの婚約破棄を含めた、彼女に対する彼の関係を考察した上で、彼による美的「宥和」の可能性のさらなる模索過程について考察した。彼は、それまでの青年時代の「諸々の放蕩」という「前歴」を自らの「憂愁」という性格ゆえに後悔したために、彼女と婚約したことを

婚約翌日にすぐに後悔した。そして自らの「憂愁」が婚約破棄の原因であることを、レギーネに察知されまいとするために、彼女に対して、「軽薄さ」を装うというイロニー態度を取って、婚約破棄に至る。ただしそれは、レギーネ及びキェルケゴール自身を「自由」にするという目的のもとに行われていた。そしてその目的のもとに、『イロニーの概念について』以後の「美的著作」も構想され、執筆されて行った。

第七章では、『イロニーの概念について』に続くキェルケゴールの「美的著作」である『あれか、これか』が、イロニーの研究及びレギーネとの婚約破棄を経て、「外見と現実性との間」に存在する矛盾としてのイロニーを美学的に克服する美的「宥和」を志向していることについて指摘した。そして、その美的「宥和」の志向においてキェルケゴールが「統制されたイロニー」を主張した背景について、「直接性」と「反省」という対概念を手がかりにして、アドルノ、マルクス、ルカーチの議論を援用して考察を行った。

まず「直接性」は、客観についての、概念的把握に依拠しない、ありのままの認識のあり方のことを指す。アドルノによれば、キェルケゴールにおいては、認識者の主観は、交換価値に占拠されつつあった盛期資本主義社会において、直接性の状態にある諸事物が手の届かないものになってしまっているように、客観にもはや到達することができないとされる。つまりキェルケゴールの「統制されたイロニー」は、貨幣と交換可能になってしまった「失われた直接性」を復権させるための、キェルケゴールの周到な術策のことである。

他方、悟性による概念的把握という作業に基づいている「反省」は、キェルケゴールが嫌悪していた「思弁」を生み出す源である。彼の同時代人マルクスは、私有財産制に基づく資本主義と「思弁」との結びつきを分析し、資本主義が人間の「思弁＝投機」を促進し、人間を他人に対して「疎遠」にさせ、自らに人間を「隷属」させる「貨幣の力」を増大させると警告していた。キェルケゴールによれば、ヘーゲル、フリードリヒ・シュレーゲル、及びティークは、「反省」的思考に囚われているとされる。

またルカーチは、資本主義について、商品関係それ自体よりもその関係の「幻影的な対象性」のほうがあたかも実体であるかのように見える事態を「物象化」と呼ぶ。彼によれば、マルクスの言う「貨幣の力」の形式的・量的還元主義から生まれる「把握可能な諸々の合目的性」はすべて「計算可能」であるという意味で、「科学的に」深化させられてゆく。この無機質な「直接性」によって、「人間の諸々の特性及び能力」までもが「所有」及び「譲渡」可能で無機質な「物」として「物象化」される事態を、ルカーチは予測している。そしてこのような「貨幣の力」がもたらす無機質な「直接性」が、「人格の有機的な統一」に基づいた元来の「直接性」を駆逐してしまったと、ルカーチは診断している。

このような「思弁」に、即ち「反省」の自己目的化に浸かりつつあった 19 世紀デンマークにおいて、この無機質な偽りの「直接性」の欺瞞性を告発し、駆逐されてしまった元来の「直接性」を復権させるために、キェルケゴールはモーツァルトの歌劇『ドン・ジョヴァンニ』を称揚する。キェルケゴールによれば、この歌劇は、「精神から疎外された直接的なもの」である「感性的直接性」を、その疎外から再び「解放」とされる。

しかしそうかといって、『ドン・ジョヴァンニ』の主人公であるドン・ファンのように、「直接性」の一面的な虜となってしまうのも問題であると、キェルケゴールは警鐘を鳴らす。彼によれば、ドン・ファンは、ヘーゲル、フリードリヒ・シュレーゲル、及びティエックのような、「反省」に囚われた人物ではなく、むしろその反対の、「直接性」に囚われた人物、即ち「反省」のいとまを与えない、「何の連関も持たない相反発し合う諸瞬間の総計」である。しかしキェルケゴールから見れば、この四者はいずれも、人間の主観性が「全能者」であるという錯覚に囚われている点において、同じ穴の貉である。

そこでキェルケゴールが辿り着いた結論が、『ドン・ジョヴァンニ』の結末における騎士団長の出現が体现している「統制されたイロニー」であった。「統制されたイロニー」の「統制された」という語は、「反省」一辺倒にも「直接性」一辺倒にもならないように厳しく戒められている、という意味で使われている。